



## 家族に知らせたいROTARY

1. ロータリアンはなぜ例会に出席するのですか？
2. アメリカで生まれ日本で育ちました
3. どんな人が会員になれるのですか
4. ロータリーの国際性を  
目の当たりにできる国際大会
5. ロータリアンをサポートするロータリー家族
6. ポリオのない世界を目指して
7. 明日を担う若い人たちを支援する  
ロータリーの奨学金
8. 国際ロータリーの規則を決める  
立法機関 規定審議会
9. 『ロータリーの友』を楽しんでいますか
10. いのちを守る「水」
11. ロータリアンたちの地域に根差した活動



## ロータリアンは なぜ例会に出席するのですか？

「仕事が忙しい」といつも言っているのに、毎週のロータリークラブの例会だけには、熱心に出かけていく。そんなロータリアンを、ご家族におもちの方も多と思います。

ロータリアンは、その例会で何をしているのでしょうか。食事をして、歓談して……、楽しいひとときを過ごしているのだらうと、ご想像になっていませんか。その通りです。でも、決して、ただ楽しんでいるだけではありません。ロータリーの例会では、仕事や日常生活に役に立つ情報を入手したり、地域社会や世界中で抱えている問題について、何か少しでも役に立とうと話し合ったりしているのです。

英語の company という言葉を英和辞典で引くと、たくさんの意味が出てきます。皆さまが最初に思いつくのが、「会社」でしょうか。「仲間」という意味もあります。この言葉はフランス語が語源で、com「一緒に、共に」と pan「パン」から成り立っています。つまり、「食事（パン）を共にする」人の集まりが、会社であり、仲間であるということです（ロータリーでは、一般的に「仲間」には fellow という言葉が当てられることが多いようですが……）。

日本でも「同じ釜の飯を食う」などと、やはり食事を共にすること、分かち合うことが、仲間としての象徴のようになっていきます。世界中のクラブを見てみると、例会で食事をしないクラブもあるようですが、日本の場合は、ほとんどのクラブが例会で食事をしています。食事は、本当の仲間になるための

大切な儀式ともいえるのではないのでしょうか。楽しい会話をしながらの食事は、家族にとっても、お互いを理解し合うためにかけがえのないひとときですが、ロータリーのような組織、グループにとっても大切な時間です。

例会には、「卓話」と呼ばれるスピーチの時間があります。日本のクラブの場合、例会時間1時間、そのうちの30分が卓話の時間に当てられているというのが一般的です。卓話には、クラブの会員が話す場合と、ゲストが話す場合があります。内容は、「最近の時事」「新しい技術」「歴史」「地域の話」「自分の職業の紹介」「音楽や美術」「ロータリーに関する情報」など、多岐にわたります。

卓話から得た情報を基に、実際に海外のある地域に井戸を掘ったり、学校を建てたり、という奉仕活動が実施された例もたくさんあります。自分の会社の経営のヒントになったという例や、人生の転機になったという例もあります。

ロータリアンは毎週例会に出席して、仲間とともに食事をして楽しいひとときを過ごします。それと同時に、さまざまな役に立つ情報を入手しています。例会への出席が、会費の納入、雑誌の購読と合わせて、ロータリアンの三大義務の一つとなっているには、こんなところに理由があるのではないのでしょうか。

ご家族の皆さま、例会に出かけるロータリアンを快く送り出してあげてください。そして、例会のあと、そのときの卓話などについて尋ねてみてください。さらに、機会を見つけて、一緒に例会に出席してはいかがでしょうか。ロータリアンとともに食事をし、卓話を聞き、興味や関心をもった奉仕活動と一緒に参加すれば、皆さまの世界が広がること請け合いです。

ロータリーが家族全員にとって身近なものになれば、共通の話題が増え、家庭でも会話が活発になり、団らんの時間が増えることでしょう。

『友』編集長 二神 典子





## アメリカで生まれ 日本で育ちました

1905年2月23日、弁護士のポール・ハリスと3人の仲間たちが、シカゴで初めての会合をもちました。これが現在、200以上の国と地域にクラブがあるロータリーの始まりです。このロータリーが日本に初めてできたのが、1920（大正9）年。10月20日に東京ロータリークラブが創立し、翌年の4月1日に、世界で855番目のクラブとして、国際ロータリー（RI）から加盟承認されました。

1905年、当時のアメリカの社会事情によって生まれ、その文化や思想などとともに育ってきた初期のロータリー。日本でも、最初はアメリカのロータリーを懸命に学んだことでしょう。

しかし、日本人は外国での発明を、自分たちが便利のようにアレンジすることがお家芸です。それどころか、場合によっては本家本元を追い抜いてしまうことさえあります。古くは、中国の漢字からひらがなやカタカナを生み、もともとの漢字と併せて、豊かな日本語を表現するようになりました。近代になると、アメリカの学者たちが発明したトランジスタをラジオに組み込み、トランジスタラジオとして商品化し普及させました。コンビニエンスストアもアメリカで生まれましたが、品ぞろえ、サービスともに本家を追い越したように思われます。こんな例は枚挙にいとまがないことでしょう。

20世紀初頭のアメリカの社会状況を反映して生まれたロータリーは、日本に入ってきたときから、当時の日本の社会事情や文化を背景に、日本的にアレンジされながら発展してきました。1940年、第

2次世界大戦のさなか、日本では対戦国アメリカ発祥のロータリークラブを続けていくことはできず、RIから脱退しました。しかし、当時のロータリアンたちは、水曜会、木曜会といったように、クラブの名前を日本的な名前に変え、日の丸を掲げ、君が代を斉唱することで、例会を続けたと言います。

戦後、1949年、RIに復帰した日本のロータリーは、その後、クラブも会員も順調に増え続け、世界で2番目のロータリー大国になりました。しかも、ロータリー財団への寄付をはじめ、あらゆる活動について、その会員数以上の実績を残してきました。目に見える活動ばかりではありません。「ロータリー哲学」と言われる、倫理や道徳をはじめ、独自の思想も形成してきました。

こうして日本には、アメリカとは一味違ったロータリーが育っていきました。もちろん、日本ばかりでなく、それぞれの国で、それぞれの文化や歴史的な背景などによって、独自のロータリーが育っています。それが、ロータリーの多様性の一つです。

残念ながら、日本では1996年を頂点に会員数が減り続けています。現在ではインドに抜かれ、3番目になってしまいました。グローバル化が進み、IT技術が発展し、新しい考えをもった世代が増え、日本のロータリアンたちは、ロータリーのあり方について、真剣に考えています。

これまで、日本の良い面を生かしてロータリーを発展させてきた日本のロータリアンのこと、新しい時代に合った、そして過去を大切にしたい、ロータリーが育っていくことと思います。

「会員が10人でも夫婦で活動すれば20人と同じ」と言って、例会や奉仕活動に、積極的に家族の参加を奨励しているクラブがあります。家族の皆さまも、ロータリーの大切な力です。ロータリーのことを知って、ロータリアンであるご家族に、新鮮なアイデアをプレゼントしてください。また、共に活動をすることで、その喜びが2倍、いえそれ以上になるように、ご協力ください。

『友』編集長 二神 典子



最初の会合に集まった四人。左から二人目がポール・ハリス



## どんな人が 会員になれるのですか

「国際ロータリー定款」という国際ロータリーの規則によれば、ロータリークラブの構成員、つまり会員のことで、「善良な成人であって、職業上、および（または）地域社会において良い世評を受けている正会員によって構成されるものとする」と書かれています。

ただし、上記の条件に合えば誰でも会員になれるということではありません。経営者や共同経営者、法人の役員や支配人や、地方代理店または支店において裁量権のある人、さらに、専門職の人たちでなくてはなりません。

このほかに、「地域社会の活動に自ら参加することによって、奉仕およびロータリーの綱領への献身を示した地域社会のリーダーである」人々や「ロータリーの財団学友」も、ロータリークラブの会員になる資格があります。

また、ロータリーができてから長い間、ロータリークラブは男性だけのクラブでしたが、1989年7月から、女性も入会できるようになりました。

職業の種類はさまざまに多岐にわたりますが、クラブに入会するとき、その人の職業によって「職業分類」と呼ばれる、職業の種類分けがされます。例えば、衣料品販売、石油配布、弁護士、外科医といったように分類していきます。

かつては、1業種1人、つまり、1つのロータリ

ークラブには、1つの職業分類の下に1人の会員しか入ることができない、という規則がありました。ロータリークラブで「会員はその職業を代表してクラブに入っている」と言われるのはこのためです。

近年、国際ロータリーの規則の改訂に伴い、1業種につき5人まで、同じ職業分類の人が入会できるようになりました。また、会員が51人以上のクラブについては、その会員数の10%を超えない限り、同じ職業分類の会員を入れることができるようになりました。このように、ロータリーの門戸は少し広く開かれるようになりましたが、それでも、ロータリークラブに入るのは狭き門。それぞれの職業を代表していることに、変わりはありません。

ロータリアンである皆さまの家族は、善良な職業人として、世間から認められた人々なのです。「家でゴロゴロしているお父さんが、そんなにすごい人だとは思えない」「いつも口うるさいお母さんが世間で認められているの？」などと話しているのは、どこのどなたですか。

ところで、「ロータリークラブの会員にはなれても、ロータリアンになるのは難しい」などという言葉聞くことがあります。ロータリークラブに入会した時点で会員にはなれますが、ロータリアンというのは、自己研鑽<sup>けんさん</sup>を積み、ロータリーでのさまざまな活動を行って、ロータリーの理念や心を理解し会得して、初めて、ロータリアンになれるといった意味で、そのようなことが言われています。

このような言葉の定義は、正式にはどこにも書かれていないのですが、日本の先輩ロータリアンたちが、自らを戒め、ロータリーの中で人間的に成長することを願って、考えたことかもしれません。

さて、あなたのご家族はロータリークラブの会員ですか、ロータリアンですか？

『友』編集長 二神 典子





## ロータリーの国際性を 目の当たりにできる国際大会

本誌8月号、9月号に、本年6月に開催されたバーミンガム国際大会の記事を掲載しましたが、お読みいただけましたでしょうか。国際大会には、ロータリアン本人だけではなく、家族も参加できます。ちょうどそのころ学校の夏休みに入っている国では、子どもたちを連れてくるロータリアンもいます。赤ん坊を抱いたロータリアンの姿を見ることもあります。また、ロータリアンのゲストとして、友人や知人も参加できます。

ロータリーの国際大会に参加した人は退会しない、といわれることも多いのですが、それはなぜでしょうか。「一度、参加したら、また行きたくなった」とか、「参加してみたら、ロータリー観が変わった」といった感想も耳にします。

『ロータリーの友』や国際ロータリー(RI)ウェブサイトなどでおなじみの、でも、そこでしか見たことのない顔が目の前に突然現れて、びっくりすることがあるのも国際大会ならではのようです。RI会長や元会長、理事や元理事とエレベーターに乗り合わせたり、すれ違ったりなどということがよく起こるのです。

毎日、午前中に開会される本会議では、RI会長のスピーチを聞くことができます。水、ポリオ、識字率向上など、さまざまな活動を実践してきたロータリアンや、そのおかげで人生が変わった人たちの

話が聞けます。これらの話には、ロータリアンばかりでなく、家族の皆さまも感動されることでしょう。午後は、それぞれのテーマに分かれて分科会が開催されていますが、ここではロータリアンの熱い思いを知ることができます。

さて、会議場を歩いていると、さまざまな民族衣装を着た人々、さまざまな人種の人々を目にします。親しそうに歓談している人が、実は初対面だったということもよくあります。お互いに英語がうまく話せないこともあるかもしれませんが、しかし、言葉の壁はあっても、同じロータリアン同士、そしてロータリアンの家族同士、心の壁はありません。違う言語で話していても、親しくなることができる、という不思議な体験ができるのも、国際大会のいいところでしょう。

こういった交流をもつには、会場に設けられている友愛の家がいいかもしれません。ここでは食事もできますから、昼食をとりながら同席した人に声をかければ、話に花が咲き、楽しいひとときをもつことができるでしょう。

友愛の家には、クラブや地区、アクション・グループなどのブースもあります。そこでそれぞれの活動の資料を入手したり、説明を聞いたりすることができますと同時に、陽気なロータリアンたちと友達になることもできるでしょう。

来年の国際大会は、カナダ・ケベック州モントリオールで6月20～23日に開催されます。12月15日までに、登録すれば、1人395ドルの登録料が295ドルになります。また、3月31日までに登録をすると345ドルになります。早速、家族会議を開いて、国際大会をスケジュールに組み込んだ旅行の計画を立ててみてはいかがでしょうか。ご家族の皆さまも楽しめること請け合いです。



友愛の家で歓談する参加者たち

『友』編集長 二神 典子



## ロータリアンをサポートする ロータリー家族

2003年2月、アメリカ・カリフォルニア州アナハイム、ガバナーエレクトの研修会である国際協議会で、笑顔がとても素敵な女性に会いました。その年の7月1日、国際ロータリー（R I）会長に就任するジョナサン・マジアベ氏の夫人、アデさんです。

しかし、6月、オーストラリア・ブリスベンで開催された国際大会に、アデさんの姿はありませんでした。そして、いよいよマジアベ会長の年度を迎える直前、全世界のロータリアンはアデ夫人の訃報に接したのです。マジアベ氏は、夫人を失った悲しみも癒えぬまま、すぐにR I本部のあるエバンストンに行き、ロータリーの仕事をこなしました。R Iの職員に、「一人でいるより、皆さんと一緒にロータリーのために働いているほうが、ずっといいのです」と話された、と伝え聞きました。

そのマジアベ氏が強調したのが、「ロータリー家族」です。マジアベ氏のいう家族とは、夫、妻、子どもなど、いわゆる血縁関係のある家族だけではありませんでした。インターアクトクラブやロータリーアクトクラブの会員たち、青少年交換学生やロータリー財団国際親善奨学生など、ロータリーとかかわりのある、またはあった人々すべてを「ロータリー家族」としたのです。さらに、亡くなられたロータリアンのご家族も、「ロータリー家族」として、

さまざまな機会に声をかけ、ロータリーの奉仕と親睦活動に参加してもらうように奨励しました。

その思いを引き継ぎ、「ロータリー家族」をR I会長の強調事項に入れたのが、2004 - 05年度、ロータリー100周年の年度にR I会長に就任した、グレン・エステス氏です。彼は、「ロータリーは、ロータリアンと家族を引き離す方向へ進むのではなく、ロータリアンが家族たちと一緒に連れてくる場であるべきです」と述べています。

続いてR I会長に就任したウィルヘルム・ステンハマー氏は、「ロータリー家族」をR I会長の強調事項に入れませんでした。しかし彼は、「私がロータリー家族を強調事項に入れなかったのは、それが不必要ということではなく、既に十分その目標が達せられたと考えるからです」と、述べています。

ロータリアンの夫人が、ロータリーで重要な役割を果たすようになったのは、ずっと時代をさかのぼり、ロータリーの創始者であるポール・ハリス夫人のジーン・ハリスさんにたどり着きます。もちろん、その後もさまざまなロータリアンの夫人たちがロータリーを支えてきました。

1989年、ロータリークラブに女性が参加するようになったのちは、女性ロータリアンの夫たちも家族として、ロータリーのさまざまな行事に参加するようになりました。元R I会長のルイス・ビセンチ・ジアイ氏の夫人、セリア・ジアイ氏は、ガバナーを務め、さらには国際協議会の研修リーダーも務めています。国際協議会での配偶者の役割は大きいのですが、ルイス・ジアイ氏は、このとき元R I会長としてではなく、配偶者としてセリア夫人のサポートに徹していました。

さて、この記事をお読みいただいているロータリー家族の皆さま、皆さまはどのような行事に参加されていますか。ロータリアンとともに、ロータリーを分かちあい、ロータリーを楽しんでください。

『友』編集長 二神 典子



国際協議会の配偶者の奉仕プロジェクトで研修リーダーの配偶者として活躍するルイス・ジアイ氏（写真中央の立っている人）



## ポリオのない世界を目指して

ポリオ（急性灰白髄炎）という病気をご存じでしょうか。ポリオは、ポリオウィルスによる中枢神経系病変によって急性まひ症状をきたす疾患です。子どもに多く発症したことから、かつては小児まひとも呼ばれていました。日本でも1960（昭和35）年にはポリオが大流行し、多くの子どもたちが犠牲になりました。翌年、カナダとソビエト連邦（当時）からポリオワクチンを緊急輸入し、子どもたちに一斉投与をおこなった結果、患者が激減し、今日では、ポリオは遠い過去のものとなっています。

1979年9月、生後3か月から36か月の子ども600万人に対して、5年のポリオ免疫接種活動が始まりました。この活動が国際ロータリー（RI）が取り組んだ最初のポリオ撲滅活動です。

先進国では過去のものとなっていたポリオですが、当時、発展途上国においては、多くの子どもたちがポリオの脅威にさらされていました。1985年2月、ロータリー創始80周年に当たって、RIはポリオ・プラス計画を発表。2005年、ロータリーが100周年を迎えるまでに、全世界の子どもたちにポリオの免疫を施そうというものです。翌1986年7月に始まった年度から、委員会が立ち上がり、実際の活動が始まりました。

活動は、免疫接種活動と資金調達に分けられます。免疫接種活動については多くのロータリアンがボラ

ンティアとして現地に出かけています。資金調達については最初の3年間で2億4,700万ドルが集まりました。日本では、このとき約49億円が集まりました。

しかし、ポリオ撲滅は、当初、考えていた以上に困難な闘いだったのです。戦争や紛争、宗教上の問題など、さまざまな理由でポリオワクチンを届けることのできない地域にも子どもたちがいます。低温で保管しなければならないワクチンですが、電気がないためにそれができない地域もありました。これらの問題は、多くの人たちの努力によって、少しずつ解決されてきました。しかし、予測よりはるかに多くの資金が必要となっています。

RIでは、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団からの、ロータリーが8,000万ドルを集めたら同額を寄付するとの申し入れを受け、2002年から3年間で8,000万ドルを集めるポリオ撲滅キャンペーンを実施、目標額の約2倍の資金を集めました。

今、RIでは、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団からの3億5,500万ドルというさらなる寄付を受け、「ロータリー2億ドルのチャレンジ」として、ポリオ撲滅のための資金集めをしています。RIがこの活動を開始した当初から現在までに、約8億ドルの資金が集まりました。

ポリオの残る国は、インド、パキスタン、アフガニスタン、ナイジェリアの4か国になりました。しかし、この最後の闘いが厳しいのです。これらの国々では、ポリオワクチンの投与を拒否する親のもとへ地元のロータリアンやボランティアが何度も足を運び、説得をしています。生まれてくる多くの子どもたち全員にワクチン投与をしようと、その調査に必死になっている人たちもいます。「ポリオを撲滅するまでこの活動を続けなければなりません。私たちは子どもたちに約束したのですから」。この活動に携わっているロータリアンたちの言葉です。



© Rotary International

『友』編集長 二神 典子



## 明日を担う若い人たちを支援するロータリーの奨学金

ロータリークラブの会員たちは、世界中でさまざまな活動をしています。ポリオの撲滅、安全な水の提供、飢餓や貧困に対する対策などの人道的支援と合わせ、明日を担う若い人々に対しての教育的支援も、たくさん実施しています。今回は、教育的支援の中から、奨学金について紹介します。

ロータリー財団国際親善奨学金は、海外に留学する人たちに支給されています。同奨学金は、民間資金において世界最大の規模を誇っているものですが、その目的は「世界各国の人々の間に理解と友好を深めること」にあります。

ロータリー財団は1917年、当時の国際ロータリー（R I）会長アーチ・クランプによって創設されましたが、その後、それほどの発展を見ることはありませんでした。1947年、ロータリーの創始者であるポール・ハリスが逝去。彼は、豪華な追悼式や像の建立を望まないとの遺志を表していたので、R Iは、「創立者へ敬意を表したい個人やクラブは、1人当たり10ドルを目安として、ポール・ハリスの名で、ロータリー財団に寄付をする」ように要請しました。

これに応じて、世界中から資金が寄せられ、その翌年、ロータリー財団では18人に奨学金を授与することができました。日本で最初に奨学生として選ばれたのが、1950年の清水長一氏、2人目で女性として初めて選ばれたのが、緒方貞子氏（元国連難

民高等弁務官）です。

ロータリー財団では、2002年にロータリー世界平和フェローシップがスタートしました。世界に7つある平和および紛争解決の分野における国際問題研究のためのロータリー・センター（ロータリー平和センター）で、世界理解や紛争解決、平和の構築について研究し修士号をとることができるのですが（タイ・チュラロンコーン大学は短期）、その奨学金をロータリー世界平和フェローシップ、奨学生をロータリー世界平和フェローといいます。

この奨学金を受けられるのは、上記のような現場で一定期間働いた経験をもつ人たちですが、修了後は、世界の最前線で平和の構築や紛争解決などのために活躍しています。

さて、日本のすべてのロータリークラブが協力して支給しているのが、ロータリー米山記念奨学金です。米山という名前は、日本で最初にできた東京ロータリークラブの創始者米山梅吉氏を記念してつけられたもので、海外から日本に留学してくる人たちに奨学金を支援しています。

ロータリーの奨学金に共通している大きな特徴は、単に奨学金として金銭を支給するだけではなく、地区やロータリークラブ、また、ロータリアンたちが、それらの奨学生をさまざまな形で支援をしているということです。そのおかげで、奨学生たちは、慣れない異国で、安心して学ぶことができます。奨学生の中には、奨学期間が終わって、何年も、何十年も、世話になったロータリアンたちとの交流を続けている人たちもたくさんいます。ロータリアンたちは、自分たちが世話をした奨学生を、長い間、本当の親のように温かい目で見守っています。

このほかにも、地区やクラブ、またはロータリアン個人が留学生や、地元の学校に通う若い人たちに奨学金を支給している例はたくさんあります。ロータリアンたちは、少しでも世界を良くしたいと思っている若い人たちを、支援し続けています。

『友』編集長 二神 典子







## 国際ロータリーの規則を決める立法機関 規定審議会

どんなに小さなグループや組織でも、何人かの人が集まればルール、規則が必要になります。国家の場合は法律や条例といったことになるのでしょうか。

例えば、日本の法律は国会で決められます。日本は民主主義の国ですから、国民の選挙によって選ばれた国会議員が法案を審議し可決されることによって、新しい法律ができたり、改正されたりします。その法案を提出するのは、内閣と国会議員。

ロータリーの場合もこれに似た制度があります。全世界にはロータリークラブがあり、また、地区と呼ばれる単位があります。立法案と呼ばれる法案を提出することができるのは、それらのロータリークラブと地区大会、そして国際ロータリー（R I）理事会、審議会、R I B I（グレート・ブリテンおよびアイルランド）審議会、またはR I B I大会となっています。

そして、それらの立法案を審議し、組織規定を改定するのが「規定審議会」と呼ばれる会合で、3年に1回開かれます。規定審議会は、R Iの立法機関です。各地区では1人ずつその会合に代表者を出します。これらの人々を代表議員と呼びます。代表議員は地区を代表して規定審議会に出席し、自分の地区から提出された立法案について説明したり、ほかの地区やR I理事会から提出された立法案について、賛成、反対の意見を述べたりします。

議論が終わると投票です。代表議員1人が1票をもっています。持ち分が地区の会員数に比例して

決まるわけではありません。選挙区によって当選できる票数に格差があることが時々問題になりますが、この点も日本の国会と似ているかもしれません。

国会中継を見ているとさまざまな議論がされていますが、規定審議会でも賛否両論、いろいろな意見が出てきます。表現方法や単語の使い方に至るまで、こちらがいい、いやあちらがいい、と、重箱の隅をつつくような意見まで出てきます。

このR Iの規定審議会が日本の国会より大変なのは、言葉や文化、政治・経済など、事情の異なる人たちが集まって議論をする点。例えば、同じ英語圏でも、イギリスとアメリカでは、単語のもつ意味、ニュアンスが異なる場合があります。もちろん、ほかの英語圏の国々や、スペイン語圏、フランス語圏でも同様です。その違ったニュアンスの意味をもつ言葉を通訳しなければならない同時通訳の人たちも、大変な能力と、気力、集中力を要求されます。

R Iに所属しているのがロータリークラブですから、クラブは規定審議会です決まったルールに反しないルールをつくらなければいけません。民主主義というのは安易な方に流れやすい傾向もあり、最近、規定審議会ですルールが改訂されるたびにロータリーの本質から遠ざかると嘆いているベテランのロータリアンも少なくありません。今年の4月に規定審議会が開催されますが、今回はどのようなことが決まるのでしょうか。

今月はちょっと硬い話になってしまいましたが、要は、ロータリーのルール、規則は民主的に変更されるということをご紹介したかったのです。

ところで、皆さまのお宅ではいかがでしょうか。家族といえども人の集まりですから、何らかのルールがあると思います。それらのルールはどのようにして決まるのでしょうか。多数決ですか？「ぼくの言うことはすべて否決される」と、嘆いているのは、どこのおとうさんですか？

『友』編集長 二神 典子





## 『ロータリーの友』を楽しんでいますか

この記事をお読みになっている皆さまは、当然、『ロータリーの友』をご存じのことと思います。本欄は、昨年の8月号からスタートしました。家族の皆さまにもっとロータリーについて知っていただきたい、というのがきっかけでした。芸がないのですが、その思いをそのままタイトルにしました。

さて、このページだけではなく、ほかのページを読んでくださっている方も多々と思いますが、感想はいかがでしょう。「家内から“ロータリーではこんな活動をしているのね”、とか、“あんなこともやっているのね”と言われて、“知らない”と答えたら、“『ロータリーの友』に載っていたのに知らないの。ダメね”と言われました」と苦笑しているロータリアンがいらっしゃいました。皆さまのご家庭ではいかがですか？

1911年1月、アメリカで『THE NATIONAL ROTARIAN』が創刊されました。現在では発行部数50万部を誇り、世界中の多くのロータリアンが読んでいる『THE ROTARIAN』の前身です。ここには、ロータリーの創始者ポール・ハリスの論文が掲載されています（『友』2010年1月号横組みP6～13に訳文を掲載）。少々難解な文章ですが、インターネットなどの通信手段がなかった当時、ロータリーの創始者の思いをすべての会員に伝える最善の方法だったのでしょう。

皆さまがお読みくださっている『ロータリーの友』は、1953(昭和28)年1月に創刊されました。当時、会員が増えてきた日本のロータリーの地区が2地

区に分割されたのが、きっかけです。両地区の会員が何かでつながってほしいという思いの表れだったのだと思います。

先日、テレビのニュースを見ていましたら、どこかで聞いたことのある話題が取り上げられていました。「ベトナムからの留学生が母国の子どもたちのために、日本の絵本を集め、ベトナム語に翻訳をして送っている」というものです。そのとき「地元のロータリークラブ……」という言葉が、私の思いを確信に変えました。

『友』を探すと、2010年3月号の識字率向上月間の特集の中に、その記事を見つけることができました。ベトナムからの米山記念奨学生の子・リン・カンさんの記事です。会ったことのない彼女がとても身近な人に思えたのですが、『友』にはこのような楽しみもあったことに気づきました。

そういった経験ができるのも、『友』の記事が、架空の読み物ではなく、ロータリアンが実際に取り組んでいる現実の活動だからです。『友』の記事の中には、ロータリアンのご家族が共に参加された記事もたくさんあります。もちろん、ロータリアンとともに活動した経験をについて、家族の皆さんが書いて投稿くださるのも大歓迎です。ご家族の投稿が増えれば、家族みんなで楽しめる『友』になるでしょうから。

『友』には、身近な記事に加え、行ったことのない遠い外国のロータリアンたちの活動も掲載されています。地球の裏側にある遠い国の一度も会ったことのないロータリアンやその家族たちが、同じように考え、同じように活動しているのは不思議な気がします。それと同時に、それらの人々に親近感を覚えることができたり、ロータリーの国際性に感動したりできるのも、ロータリーの雑誌のよいところかもしれません。

『ロータリーの友』を通して、これからもロータリーをお楽しみください。

『友』編集長 二神 典子



1953年1月号(創刊号)～6月号



## いのちを守る「水」

日本に住む私たちは、蛇口をひねると、いつでもきれいな水を手に入れることができます。「最近はお金を払って水を買う時代になった。世の中、変わったねえ」などと言われて久しくなりますが、それは私たちがおいしい水を求めているからで、決して水道や井戸の水が不衛生で飲めないから買っているわけではありません。

私たちは、そのきれいな水を風呂やトイレにも使っています。一方で、世界の中には、何キロも歩いて飲み水をくみにいかなければならない人たちがいます。かなりの重労働ですが、女性や子どもたちがその役割を担っていることが多いのです。また、水くみのために学校に行くことができず、読み書きや基本的な計算ができない子どもたちもいます。そのために、大人になってももともな職業に就くことができず、貧困から逃れることができません。このような悪循環も起こるのです。

ところで、遠い川や水くみ場、または井戸に行っても、必ずしも安全な水が手に入るとは限りません。泥水や、ヒ素など体に悪い物質が混じっていることもあります。このような水を飲むと、感染症にかかり、いのちを落とすこともあります。しかし、そんな水しか手に入らないので、汚染された水を飲むしかないのです。

水が汚染される原因は、もともと土壌に体に害のある物質があって、それが水に溶け出してしまうこ

とが考えられます。しかし、それだけではなく、トイレや下水などの衛生設備がないために、排せつ物などが井戸や川に流れ出してしまうケースもあります。また、衛生に関する知識も十分でない場合があります。世界保健機関の推定では、全世界の疾病の10%は、水の供給、衛生、水資源管理を改善することで予防できるとされています。

人々に安全な水を提供することは、国際ロータリーの目標の一つになっていて、ロータリアンたちは、さまざまな形で、水の問題に取り組んでいます。人々が、何キロも歩くことなく水が手に入るようにと、村や学校に井戸を掘ったり、簡易水道の設備を提供したりしています。安全な水を確保するために、フィルターを取り付けることもあります。また、トイレや下水処理の施設を提供して、飲み水に排せつ物が混ざらないようにしている例もあります。

京都のロータリアンたちは、ため池などの、あまり衛生的ではない水を利用したり、子どもたちが遠くまで水をくみに行かなければならなかった学校に、井戸を贈りました。四国のロータリアンたちは、ヒ素で汚染されたバングラデシュの村にフィルター付きの井戸を贈りました。広島や東京のロータリアンたちは、地面を掘っても塩水しか出てこないミクロネシア連邦の島々に住む人々のために、乾期に水を確保するための、海水を天日で熱して真水に変える、浄水器を設置しています。

発展途上国にこのような設備を提供する場合に大切なのは、使い方やメンテナンスが簡単なことと、ランニングコストが安く済むこと。あまり高価な設備や装置を贈ると、管理ができなくて、結局は放置されてしまうと聞きました。

一杯の水を飲むときに、何の心配もしないでおいしい水が飲める幸せをかみしめ、安全な水を手に入れられない人々のためにできることはないのか、皆さまのご家族で、考えてみてください。

『友』編集長 二神 典子



©Rotary International



## ロータリアンたちの地域に根差した活動

昨年の8月からお届けしているこのシリーズも、今回で最後になります。これまでロータリーの活動について、いろいろと紹介してきましたが、今回は、皆さまに身近な活動を紹介したいと思います。

ロータリークラブには、それぞれ所在地域があります。ロータリアンは、その地域社会で仕事をしていたり、住んでいたりしますが、その身近な地域社会の中で、いろいろなニーズを見つけて奉仕活動をしています。

地域社会への奉仕活動をロータリーでは社会奉仕と呼んでいます。初めての奉仕は、シカゴのダウンタウンに公衆便所をつくったこととされています。当時、女性が使えるものは百貨店の中しかなく、男性の多くは居酒屋を使わなければなりません。今では当たり前の公衆便所ですが、当時はこの設置に、強い反対があったようです。

地域社会での奉仕活動としては、例えば、中学生を対象にスポーツ大会を開催したり、小学生を対象に作文や絵画のコンテストをしたり……。童心に帰って、竹とんぼやお手玉などの「むかし遊び」を今の子どもたちに教えるといったこともあります。若い人たちが将来、職業を選択したり、また、社会人になったときに役に立つよう学校で自分の職業体験を話す、という活動を続けているクラブもあります。

独り暮らしのお年寄りを訪問して話し相手になったり、施設を訪問したりもしています。ロータリアンには、結構、芸達者の人がいます。バンドを結成して音楽を披露したり、手品をやったり……。そうそう落語ができる人もいます。そんな特技を生かして、施設の人たちと楽しいひとときを過ごすこともあります。

時計塔や地域の案内板、ベンチを贈ったり、駅や講演などの清掃活動をすることもあります。さらには、国体やマラソン大会など、地元でイベントが開催されるとき、ボランティアとして水を配った

り、交通整理をしたりすることもあります。

これらの活動をするときに大事なことは、ニーズに合った活動をすることです。地域社会には、数え切れないくらい多くのニーズがありますが、そのニーズを見つけ、地域社会の人々に本当に喜んでもらえる活動をするのは、意外に難しいことなのです。

なぜなら、多くのロータリアンは日々仕事に追われ、地元の活動に接する機会が少ないからです。そこで重要なのが、家族の協力。隣近所との付き合いや、地元の学校などでの情報は、きっと家庭を守っているおかあさんや、地元の学校に通っているお子さんたちの方が、よくご存じなのではありませんか。

どんな小さなことでも構いません。学校での出来事、友達との会話や買い物に出かけたときに気づいたことなど、身の回りの出来事を、ロータリアンである家族に話してみてください。家族の皆さまからの情報が、きっと新しいロータリーの活動に結びつくことでしょう。

さらに、それらの活動を実施するとき、ロータリアンと一緒に参加してみませんか。いつも話にだけ聞いていたロータリーが、ぐんと身近になることでしょう。ご家族のみなさん、ロータリアンを助け、ロータリアンとともに活動ください。

『友』編集長 二神 典子

